

特別講座

栃木県ゆかりの書人

― 豊道春海を中心として ―



令和三年三月十四日(日) 九時〜十二時

宇都宮東市民活動センター

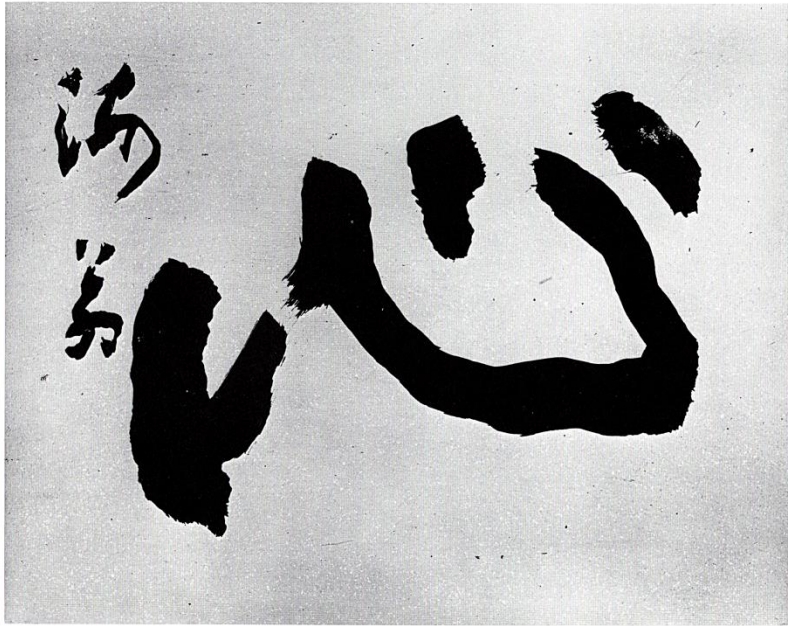


天平神護二年勝道上人開山

日光山輪王寺

昭和三十年一月建

日本藝術院會員天台沙門豐道慶中書



65 心 昭和45年(1970) 93歳



郭沫若 政治家・文学者・歴史家・金石家。
1963年中日友好協会名誉会長



日光廟大猷院





70 月桂冠 昭和31年(1956) 79歳





77「三井銀行」 ロゴタイプ



78「足利銀行」 ロゴタイプ





81 精神 昭和37年(1962) 85歳

杜甫詩 「書堂飲既夜復邀李尚書下馬月下賦」

湖月林風おと清
残尊下馬復同傾
久拏野鶴如双鬢
遮莫隣鷄下五更

杜甫七言絶句 湖月林風 昭和三十九年(1964) 87歳

湖月林風相与清 残尊下馬復同傾
久拏野鶴如双鬢 遮莫隣鷄下五更

湖月(こげつ)林風 相与(あいとも)に清し
残尊(ざんそん) 馬より下りて復た同(とも)に傾く
久しく拏(ひる)がえす野鶴(やかく)の双鬢(そうびん)の如きに
遮莫(さかも)あらばあれ隣鷄(りんけい)の五更(ごせい)を下るを

湖面に映る月と林を渡る風はともに清々しく、馬から下りて李之芳殿と共に残った酒がめを傾ける。左右の鬢の毛はなすがままで、野生の鶴のように真っ白になりっぱなしであるが、そんなことはどうでもよい、とにかく、隣家の鷄が夜明けにもならないのに隣の鷄が鳴き始めたが、かまうものか、だから、このまま飲み続けよう。

家蔵作品

天地無私 為善自然獲福
聖賢有教 修身可以齊家
修身可以齊家
聖賢有教 修身可以齊家

天地無私 為善自然獲福 聖賢有教 修身可以齊家

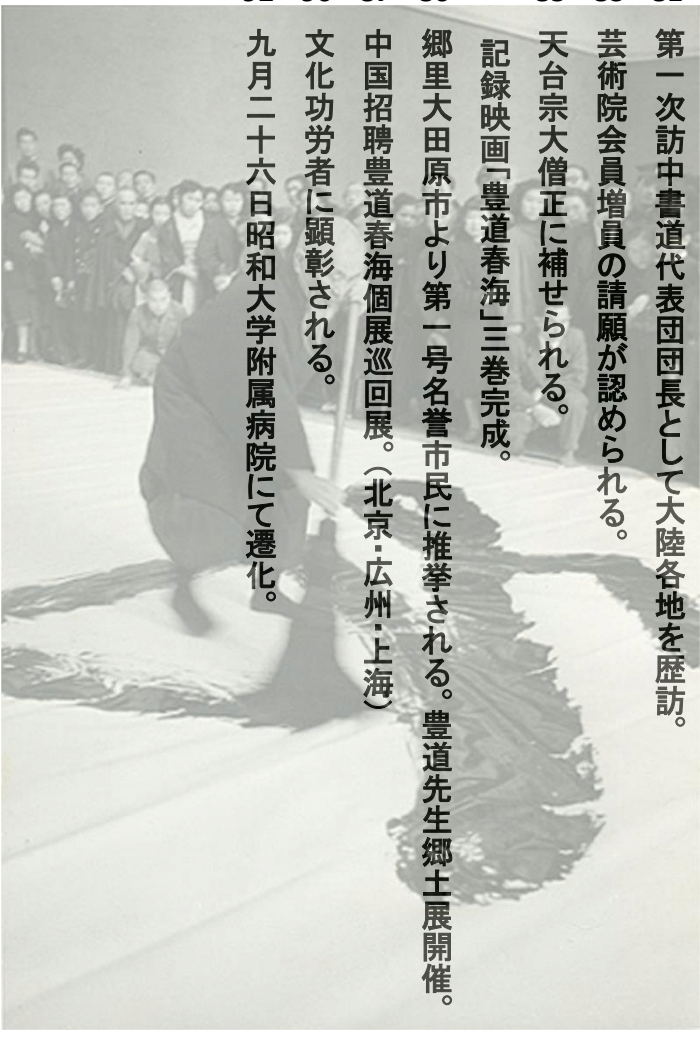
天地、私無し。善を為さば自然福を獲る。

聖賢、教え有り。身を修めば以て家^{ととの}齊うべし。

※道教に基づく勸善齊家の句。正月の春聯に良く書かれる。

豊道春海略年譜

- 明 11 (一八七八) 1 那須郡佐久山町(現大田原市)に川上茂平の三男として出生。幼名寅吉。
- 明 13 (一八八〇) 3 楊守敬来日、六朝金石書道を紹介。日下部鳴鶴、巖谷一六ら刺激を受く。一
- 明 21 (一八八八) 11 上野春性院にて修行、池ノ端青梅小学校に通学。
- 明 23 (一八九〇) 13 得度出家受戒・坊号を常応坊慶中と改む。次いで豊道家を継ぐ。
- 明 24 (一八九一) 14 西川春洞門に入り書道を始める。
- 明 28 (一八九五) 18 天台宗覺(学舎)に入り灌頂をうける。
- 明 34 (一九〇一) 24 下谷東亜女学校(台東区)に書道教師となる。
- 大 3 (一九一四) 37 大正博覧会行書千字文が最高賞銀牌を受ける。同展出陳の超大筆を購入。
瑞雲書道会を興す。
- 大 11 (一九二二) 45 平和博覧会審査官。天台宗中学教諭。西川春洞記念碑揮毫。
- 大 13 (一九二四) 47 日本書道作振会を創立。書道の振興発展に勤める。
- 大 15 (一九二六) 49 堵美術館建設後、初めての書道展開催を実現。
- 昭 22 (一九四七) 70 帝国芸術院会員就任。
- 昭 23 (一九四八) 71 日展に書道部五科新設実現・日展理事就任。
- 昭 25 (一九五〇) 73 全日本書道教育協会会長就任。5年間の働きかけにより、26年より
小・中学校毛筆習字が国語科において必修となる。
- 昭 33 (一九五八) 81 第一次訪中書道代表団団長として大陸各地を歴訪。
- 昭 35 (一九六〇) 83 芸術院会員増員の請願が認められる。
- 昭 37 (一九六二) 85 天台宗大僧正に補せられる。
記録映画「豊道春海」三巻完成。
- 昭 38 (一九六三) 86 郷里大田原市より第一号名誉市民に推挙される。豊道先生郷土展開催。
- 昭 39 (一九六四) 87 中国招聘豊道春海個展巡回展。(北京・広州・上海)
- 昭 42 (一九六七) 90 文化功労者に顕彰される。
- 昭 44 (一九六九) 92 九月二十六日昭和大学附属病院にて遷化。



豊道春海翁顕彰碑

(大田原市)



わが書道と宗教

豊道 春海

一、書道の真義

書——とはどういうものか、と問われる場合がよくあります。

私は卒直に、象形・会意、等の六義(後述)を基礎とする文字を美化したものが、書であり、そして、それはわが国の芸術としては最も香り高い、最高のものの一つに数うべきもので、しかも教育と実用とを兼ね備えたものである、と答えるのを常としております。更に書は行の道であるから、高論卓説よりも着実な実行が大切である、と、つけ加えるのであります。そして「わが書道と宗教」これは直接的にも、また、書道と宗教がそれぞれ包含する内容的にも、切り離すことのできない不可分のものであると信じています。

今、仮りに宗教という言葉を「心法」という字に置きかえてみますと、これは一層ご理解がいくかと思えます。

茶道の方で「茶禅一味」という言葉がありますが、私は常に「書禅一意」と言っております。「書は心画なり」というのも、これと殆んど同意語といえましよう。

書道と宗教——書と心——というものについて、私が平素考えていることを、つとめて平易に申し述べてみましょう。

書、は古くから「君子の技」と申し、品位を尊ぶ道とされており、我が国の三筆と言われる、嵯峨天皇・橘逸勢・僧空海、或いは又三蹟と言われる、小野道風・藤原佐理・藤原行成は、わが国書道の代表的な方々であることはご承知のことと思えますが、平安朝の昔から、これら三筆、三蹟の他にも立派な名筆家が数多く出ております。いづれも人格識見共に優れ、単に能筆であるばかりでなく、技と心、並に、学徳兼ね備え、万人に優れた名筆家でありました。このことこそ、我ら後代の者の、尊崇畏敬する所

以なのであります。

思うに、芸術の振興を図るには、洋の東西を論ずべきではなく、況や日中文化の交流からも、幾多名筆の碑拓や筆蹟を学び、古聖の金言名句を筆にし、日々怠りなければ、自ずから、技の練磨は申すに及ばず、心の修煉、人格の陶冶は期せずして行われるものと信じております。

これを、もう少し具体的に申しますと、書道は第一に「沈静を崇ぶ道」であります。平素より静坐黙想、徐ろに筆硯を清め、墨香に心意を清くし、淨稽に向かい、正しい姿勢をもつて、たゆまざる練磨を重ねる、これこそ書道の最も平易な基本的要諦でありまして、かの柳公権は、「心正しければ筆正し」と言っておりますが、逆説的に申せば、筆正しくて心自ずから正し、とも言えると思っております。これが真の書道を学ぶことの大いなる意義のあるところなのであります。

それに、これらの心根を鍛えるには、常に大乘仏教の精神に立脚して、徒らに毀誉褒貶に動かされぬ覚悟が大切で、いかなる難事に遭遇しても、毅然として「悪人に喜ばるるは、善人に憎まるるより恐るべし」この正義の觀察を謬らぬ用意が肝要であります。それと同時に、小乗の人は勤勞にして道心なく、外道と言われるものは聡明のようではあるが、正智に欠ける憾みがある、というような欠陥が、自分自身にあつてはならないのであります。

わが国民は古くから、神・儒・仏の三道をもつて魂を養われましたので、これを軽視し、その恩恵を空しくせぬことこそ大切であります。日進月歩で世の中は、日一日と進歩はしますが、天日の永くかわらざるが如く、物質文明にのみ重点をおいて精神文化が退歩しては、日本の誇りを失う懼れがありますから、古きをたずねて、新しきを知る、「温故知新」の妙用を忘れたり、失うことのないように心すべきであると思っております。

二、書道は諸道

私は常に、書道は諸道（もろもろのみち）であつて、単に筆先ばかりのものでなく、世道人心に関するもろもろの道を修める基本の一であると信じています。その目標となる古聖を我が国に求めるならば、宗祖伝教大師も、

わが国仏教界の開祖として厚く尊崇されていますし、又、書道にも深い緑由のある上宮聖徳太子の如き世界的の御方がおられるのでありますから、私はこれらの先哲を一大理想とする信念を、平常自ずからの脳裡に納め、深く尊重しておるのであります。更に、かの道元禪師は「平常心是れ道」と申されましたが、行住坐臥、日々夜々、人間完成に向かつて進むには、その生活のすべてが表裏のない、正しいものでなければなりません。私の場合を申し上げれば洵に不備の者ではありませんが、日々の生活が仏心と書道を中心として、即ち、筆を持ち、そしてたゆまざる練磨をする生活のすべてが仏教の因果応報の道理に基づき、世に愧じないもの、己れの心に恥ずかしくないものでなければならぬと考え、日常反省につとめております。私は少くともそのように心に誓っておるのであります。「君子はその独りを慎しむ」の語は大いに含味すべきであります。しかし正義感の強固であっても、一面水の如く、その徳性を失うことなく、偏狭にならぬよう心がけることもまた大切なことでもあります。かの孔子の門において有名な曾子は「日に三たび、わが家を省みる」と言われました。人は常に私心を捨て、自己の行いを反省し、より一層の修養に心がけねばなりません。故に書道の真味はもろもろの道を究めると共に、常に己れを省みることが必要で、書品の低いのも、筆力の乏しいものも、心の修練の足りないためであると思われます。そこで私は語音を借りて「書道は諸道」であって、道心を養うことが最も大切であり、決して筆先ばかりのものではないということ強く申しておるのであります。古人は、心堅からざれば書に勁健なし、と云われており、学者は大いに一考を要します。今日はブームと言われるほど書道が盛んになっており、洵に悦ぶべき現象ではあります。私の見解では、書は盛んではあるが、惜むらくは道の觀念が稀薄になりつゝあるということを考えて、真の書道が盛んだとは申せず、将来のためには、むしろ憂慮に堪えぬものがあります。幸いにして杞憂に過ぎぬことを心から祈るものであります。

三、書は心画なり

書は学習する人の心を清くするということが第一でなければなりません

ん。そして法句経の「森羅万象一法之所レ印」とあるように、諸般の上に円融無碍の精神を鍛練しなければなりません。書はもとより書法、書技も大切であります。しかるに現代では書は「単なる文字の造形芸術どある……」と言う一部の説もありますが、私は単なる造型のみであるとは思いません。書論に「形体を得るは筆法を得るに如かず、筆法を得るは氣象を得るに如かず」と言われておりますように、書はむしろ精神的芸術で、もつとも高度のものである、と言いたいのであります。その書によって君子と小人とがわかると言われる位で、心の姿を表わすものであります。前述いたしましたように、古来「書は心画」と言い、心の精華、人格の表現とまで言われ、その「心」を仏教では心法無形十方に遍満すと申し、古歌に「心とはいかなるものと思いに、手にもとられず、天地いっばい」と言われてるように、人々の持つ心の養い方一つで、小さく縮まるのも、天下の偉人として神にも仏にも尊嵩される人となるのも、修養の一つで定まるので、つまり、その人の個性がはっきり現われ、無形であるところの人の心が書においてその優劣が明らかに見られるのでありまして恐ろしいほど厳しい道であるのであります。

「文は入り難くして成り易く、書は入り易くして成り難し」と古人はこの道の難しさを言っております。物事は「難きを尊ぶ」即ち「艱難汝を玉にす」ということを忘れてはならないと思えます。「流れに従うは死魚のみ」で道を修めるといふことは、いかなる種類の道であろうとも「安易」といふことはあり得ないと思えます。即ち「修業」とか「稽古」とか申される意義をよく考えるべきで、鯉の滝のぼりをする意気と努力が必要であります。書の道においては、技法と心法と共に備わらねばならぬところに、厳しさと難かしさがあるのであります。これこそ人間完成への道程であり、わが書道の真髄であると深く信ずるものであります。

明治天皇の御製に

鏡にはうつらぬ人の真心も

さやかに見ゆる水莖のあと

とお詠みになったのは、書道の本当の姿を表現された、そしてお示めしになったものであると拝察いたします。

豊道春海翁をしのぶ

西川 寧

◇幼少からのおつきあい

豊道春海先生は昭和四十五年九月二十六日、九十三歳で長逝された。私とは二まわり違いの寅(とら)年だが、私の父が先生にとっては書の道の師匠というわけで、生れてこの方六十八年というもの、いつもにらみ乍ら、にらまれ乍らで過ぎた。永いおつき合いだけに、今急に何から書いたものか始末がつくものではない。幼い頃から刻苦勉励の先生にとって、若い頃の私のやることは一々度はづれで、いつも、はらはらさせたり、なげかせたり、怒らせたりで始末におえなかったのだし、私が年をくっては、よく突込んだり、反対したりで、先生にとって又こんな厭な男もなかったのであろう。多分半世紀にわたる、こうしたからみ合いは人間関係としてはまあ珍らしいことなのかも知れないが、だからこそ、何を書いたものか解らない。

私の父春洞は六朝の北派を好んだので、先生の書も自然北派から出発するが、根が刻苦の人であるだけに出来上った先生一流の書も剛健一本であった。大正三年の大正博覧会に出品した作品で尾上柴舟先生と共に銀賞となったが、これが書の部門の最高賞なので一躍書名をはせることになる。三十七歳である。

◇大震災以後

大正十二年(先生四十六歳)の大震災で精神作興の詔勅というのが出たが、先生は書の方でこれにこたえようというのでその宣言文を二、三間の大きな布にかいて本所の被服廠の焼け跡(後の震災記念堂)におし立て、日

比谷公園の音楽堂で野外書道展を挙行した。趣意といい、やり方といい、いかにも先生らしいが、これから先生の積極的な運動が始まる。

運動の第一はこの翌年の書道作振会の創立。まだ近代的な展覧会らしいものがない時代に、はじめてそれをこしらえた功績は大きいと云わざるを得ない。この会の後身たる泰東書道院は、当時の書道界では最も大きな団体となって戦争末期まで続くが、先生はその間日展に書の部門を入れることを念願とする議会への請願運動をしきりに展開した。

◇敗戦以後

第一に書の部門の日展参加。

昭和二十二年に先生は芸術院会員となり、その翌年、ながい念願がかなって、日展に第五科（書）の部門が出来ることに成った。

こんなわけで、今日の書の隆盛は何といっても先生の力を心棒にしてもり上って来たといわざるを得ない。

第二に学校の毛筆習字の復活。

戦後の占領政策の時代、毛筆習字が無用の長物として排斥されてしまったのを憤慨して何度かGHQに出かけて談判してイエスを取りつけてしまった。短軀（たんく）の先生のいでたちが、いつも黒紋付きの羽織にくくりばかま、あごには長いひげをたくわえている。これでどこへでもおし出していく。GHQでもこのいでたちで、携帯の矢立てを取り出して大小自由かくの如しとデモンストレーションをやったというが、これには米人もびっくりしたことだろう。だがこのユーモラスな説教がもとで毛筆習字の復活ということになったのは事実である。

第三には書による中国との文化交流。

日中文化交流協会が出来ると、その顧問として終始熱心に尽力され、昭和三十三年、第一回の訪中書道代表団が中国に行った時、八十一歳の高齡

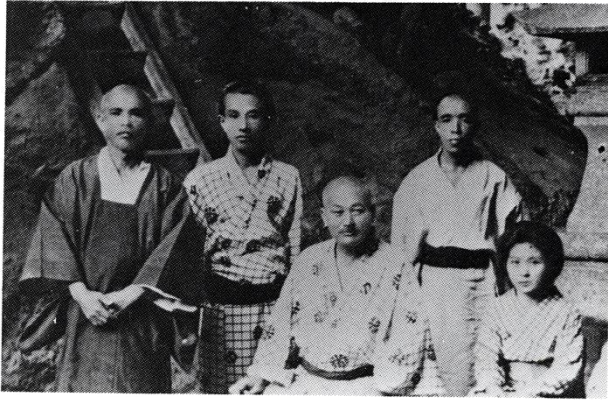
で団長となり、この時もくくりばかまで押し通したが、新興の気性にもえる中国の青年達の活動に感激した先生は、行く先々で進んで激励演説をはじめたり握手したりで、かえって若い団員たちがへきえきしてしまったり。

その後何度かの交換書道展や訪中書道団を指導し、日本へ来た中国の代表たちを度々自宅に招待して交歓したりする。

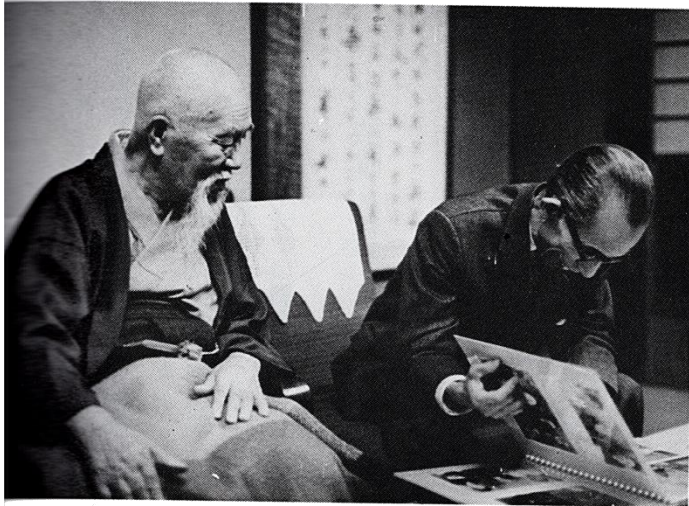
昭和三十九年には、中国からの招請で先生の個展が北京、上海、広州の三ヶ所で開かれることになった。今まで日本国内で個展を開くこともなかった先生にとって、書の本場の中国での初めての個展は皮肉ともいえるが、中国としても外国の作家の個展を開くということには後にも先にもなかったことである。先生は再び中国に行かれることになり私も随行した。八十七歳の先生の礼節は正しいが、老輩の風流といったユーモラスな態度はいつも場を庄するという形で、その開会日の歓迎宴などは実に盛んなものであった。これほど効果をあげた民間外交は少ないのではないか。

なお先生は十三歳のとき上野の寛永寺で出家されたが、後には大僧正となり、また文化功労者にも選ばれた。

(文学博士・文化功労者・芸術院会員 昭和四十五年十月二日(夕) 東京新聞「掲載の文による」)



昇仙峽にて (中央豊道春海, その左西川寧)



訪中の思い出をひもとく

栃木県ゆかりの書人 2

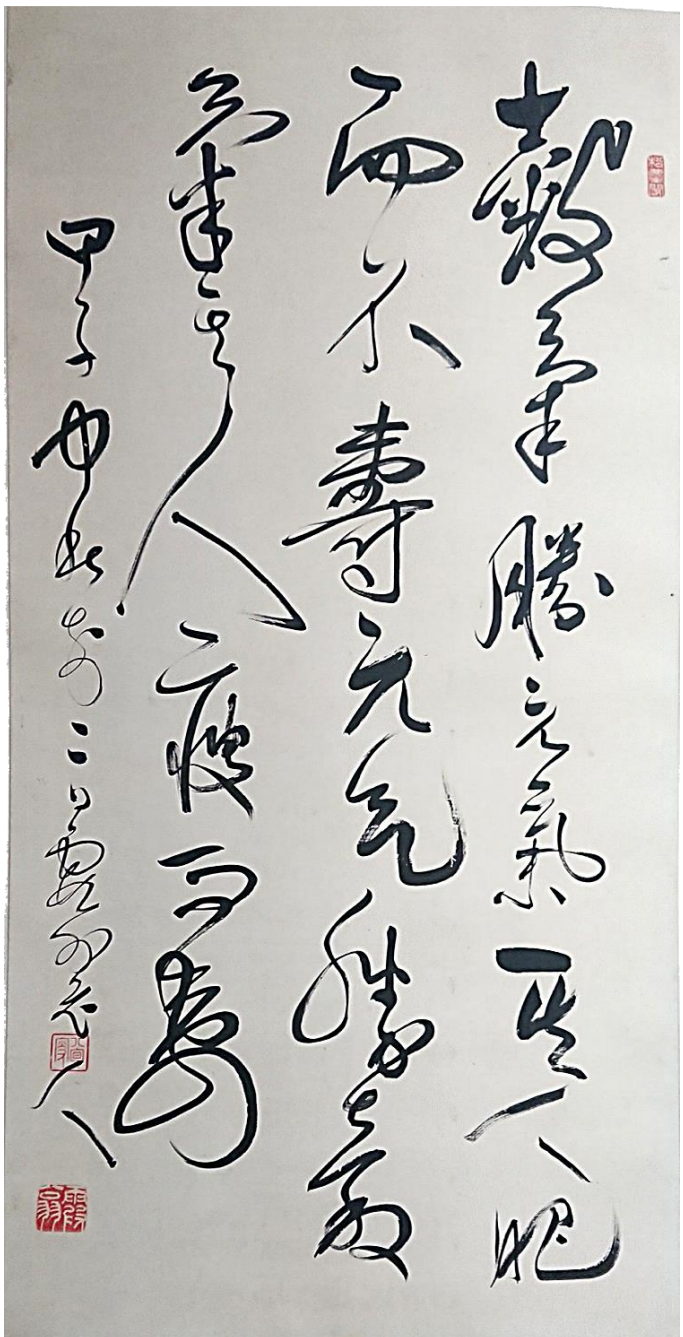
お やま か がい

小山霞外

小山霞外（一七八五～一八六四）

江戸時代後期の書家。天明五年生まれ。小山家の養子となり、古河にすむ。書と儒学を立原翠軒にまなび、高久靄厓（たかくあいがい）らに書を教えた。水戸藩主徳川斉昭もその書を愛蔵したという。漢詩・画・和歌にも長じた。尊王思想をいただき藤田東湖、大橋訥庵（とつあん）らとまじわった。元治元年十月四日死去。八十歳。下野（栃木県）喜連川出身。本姓は星。名は朝孺（ともつま）。字は大晰。通称は周徴。別号に霞翁・霞隠。

「養生語」



「穀氣勝元氣、其人肥而不壽。元氣勝穀氣、其人瘦而壽。」

「觀星樓所藏」

「穀氣元氣に勝つは、其人肥して寿ひさしからず。元氣穀氣に勝つは、其人瘦て壽いのちながし」※穀氣は食物の栄養。元氣は成長促進、活力を旺盛にする人体の氣。

これは李昉らの編で宋の太平興国八年(九八三)に成立した『太平御覽(ぎよらん)』疾病部二に所収される養生語。日本でも『遐年要抄』人倫部瘦人不寿第六など、養生書の類に収められている。

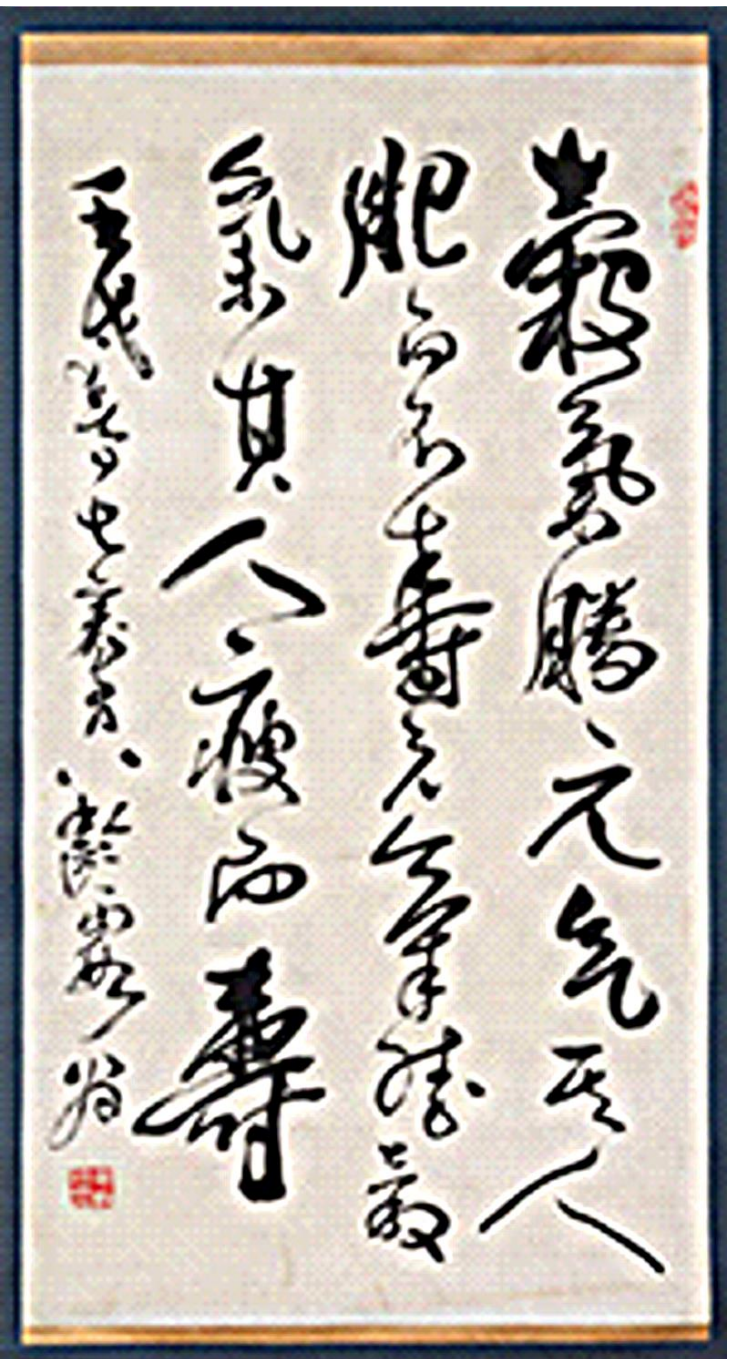
霞外が他界する二ヶ月ほど前に書いた最晩年の書。

常総市／デジタルミュージアム

坂野家書画資料解説

「坂野家の書画資料」坂野家収集書画より

小山霞外『養生語』



「勝」「其人」や「穀氣」「元氣」など同じ字を行書と草書で書き分け、

変化をつけている。一見、同様の行書に見える「壽」もくずししの程度

が異なり、豪快な書のようにでありながら、緻密な配慮が看取される。

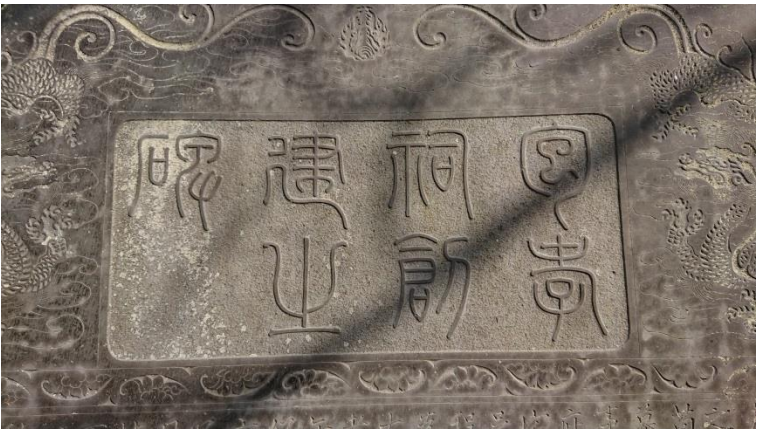
特に「氣」は四度の「气」として、「气」も用いているが、これは気構えのみ

とした「氣」の省文(略字)というより、「氣」と通用の漢字「气」と解する

べきである。落款部は「壬戌（一八六二年）春日七差有八齡霞翁」で、

家蔵より二年前の書であることがわかる。

包孝祠創建之碑（小山霞外による書および篆額）



佐野市戸奈良町（田沼）にある
鹿嶋神社境内に立つ。

小山霞外の三絶

龍祥鳳舞の如き草書

格調高き楷書

当代に傑出した篆書



田沼の偉人

石井包孝かねたか（一七七七〜一八四三）

江戸時代後期の豪商、農政家。明和8年生まれ。

下野（しもつけ）（栃木県）田沼の絹織物商の養子となり、
呉服商、質屋、貸家業もいとなむ。私財を投じて新田開
発、治水につくし、天保（てんぽう）の飢饉（ききん）では村
民救済につとめる。宿場への賦役（ふえき）解除運動の中
心ともなった。

天保14年1月4日死去。73歳。本姓は須藤。通称は五
郎左衛門。



種徳院(佐野市)



石井家代々の墓地

石井翁壽藏碑記

石井翁壽藏碑記
 石井翁名也壽稱三郎左衛門下毛戶奈民邨人季已七衰侍候於子由重以養之
 於其履歷介人逸守之宗余記其狀曰君原姓須藤氏生下毛止多由村守河
 津右衛門宗嗣第三子石井氏諱昌晉家世農有女妻男因乞養君為後以女
 之舉三男四女長即由重也君為人朴實慈良其未嗣也善鑽菟志謹守世業勤
 自平家產不特在農畝而又販鬻繼續年率數千段迨後置子石井江都及上毛相
 生又購得山林田園及市廛地若干區址之注特不啻倍蓰也邑主諏訪使君
 之士類賜俸十二口班亞用人又本姓須藤氏藉在君根戾別封以其治思不少
 金一十錢以申謝侯嘉之賜家章禮胙并粟二十口戶奈良村嘗助役於野木驛民
 丁長之因請縣官納金八百八十錢子息之充備資以除其徭役見允於
 是閭邦感戴視如父母其惠而被及旁近丙申己後頻年秋荒民多饑困君數賑
 之所活不計其數之類不可枚舉嗚呼富者多驕儉者多嗇而好施富而益恭吾
 未見其人也不合據狀之而載君即其人歟抑又人生有限其真善哉以益外焉亦其
 知有命者斯為難得也已有不辨而記之俾其預勒之以待其後之垣哉月
 天保用子歲四月下齡江都佐藤撰文

佐野市種徳院石井家墓所

栃木県ゆかりの書人 3

亀田鵬齋

亀田鵬齋(かめだぼうさい 一七五二年～一八二六年)

江戸時代の化政文化期の書家、儒学者、文人。江戸神田生れ

(**上野国邑楽郡富永村上五箇村生まれの異説あり**)。鵬齋は号。

名を翼、後に長興に改名。略して興(おこる)。字は国南、公龍、穉龍(ちりゆう)、士龍、士雲、公芸。幼名を彌吉、通称文左衛門。

父は萬右衛門といい、上野国邑楽郡富永村上五箇村（現在の群馬県邑楽郡千代田町上五箇）の出身で日本橋横山町の鼈甲商長門屋の通い番頭であったが、鵬齋が7歳のころにこの長門屋を継いだ。母の秀は、鵬齋を生んで僅か9カ月後に歿した。

鵬齋は6歳にして三井親和より書の手ほどきを受け、町内の飯塚肥山について素読を習った。14歳の時、井上金峨に入門。才能は弟子の中でも群を抜き、金峨を驚嘆させている。この頃の同門山本北山とは終生の友となる。23歳で私塾を開き経学や書などを教え、躋寿館においても教鞭を執った。赤坂日枝神社、駿河台、本所横川出村などに居を構え、享和元年（1801年）50歳のとき下谷金杉に移り住んだ。妻佐慧との間に数人の子を生んだが皆早世し、亀田綾瀬のみ生存し、のちに儒学者・書家となる。亀田鶯谷（かめだおうこく）は孫にあたる。

鵬齋は豪放磊落な性質で、その学問は甚だ見識が高く、その私塾（乾々堂↓育英堂↓楽群堂）には多くの旗本や御家人の子弟などが入門した。彼の学問は折衷学派に属し、すべての規範は己の中にあり、己を唯一の基準として善悪を判断せよとするものだった。従って、社会的な権威をすべて否定的に捉えていた。

松平定信が老中となり、寛政の改革が始まると幕府正学となった朱子学以外の学問を排斥する「寛政異学の禁」が發布される。山本北山、冢田大峯、豊島豊洲、市川鶴鳴とともに「異学の五鬼」とされてしまい、千人以上いたといわれる門下生のほとんどを失った。その後、酒に溺れ貧困に窮するも庶民から「金杉の酔先生」と親しまれた。

塾を閉じ50歳頃より各地を旅し、多くの文人や粹人らと交流する。

享和2年（1802年）に谷文晁、酒井抱一らとともに常陸国（現茨城県龍ヶ崎市）を旅する。この後、この3人は「下谷の三幅対」と呼ばれ、生涯の友となった。文化5年、妻佐慧歿す。その悲しみを紛らわすためか、翌年日光を訪れそのまま信州から越後、さらに佐渡を旅した。この間、出雲崎にて良寛和尚と運命的な出会いがあった。3年にわたる旅費の多くは越後商人がスポンサーとして賄った。60歳で江戸に戻るとその書は大いに人気を博し、人々は競って揮毫を求めた。一日の潤筆料が5両を超えたという。この頃、酒井抱一が近所に転居して、鵬齋の生活の手助けをしはじめた。

鵬齋の書は現代欧米収集家から「フライング・ダンス」と形容されるが、空中に飛翔し飛び回るような独特な書法で知られる。「鵬齋は越後がえりで字がくねり」という川柳が残されているが、良寛より懷素に大きく影響を受けた。

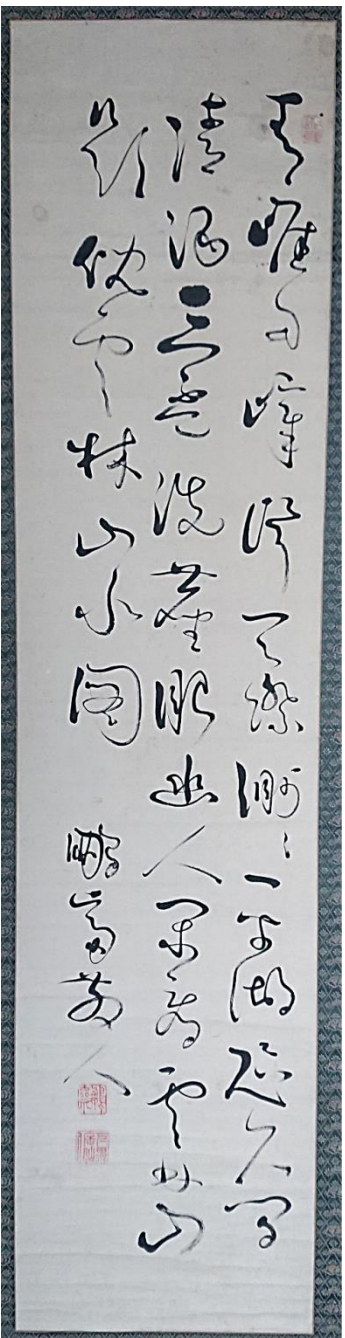
鵬齋は心根の優しい人柄でも知られ、浅間山大噴火（天明3年）による難民を救済するため、すべての蔵書を売り払いそれに充てたという。また赤穂浪士の忠義に感じ、私財を投じて高輪の泉岳寺に記念碑を建てている。定宿としていた浦和の宿屋の窮状を救うため、百両を気前よく提供したという逸話も残っている。

晩年、中風を病み半身不随となるが書と詩作を続けた。享年75。今戸称福寺（台東区）に葬られる。現在鵬齋が書いたとされる石碑が全国に70基以上確認できる。

亀田鵬齋「題倪雲林山水図」

雲林山水図をみて題す

※倪は睨に通ず



〔観星楼所蔵〕

青唯好嶂聳天際 渺々平湖咫尺間。

清酒三盃洗塵眼 幽人閑看雲林山。

青なるはこれの天際を好しとす。

渺々たる平湖、咫尺の間。

清酒三盃すれば塵眼を洗い、

幽人は閑かにして雲林山を看る。



嶂聳…高く険しくそびえる山

渺々…広い水(湖面)

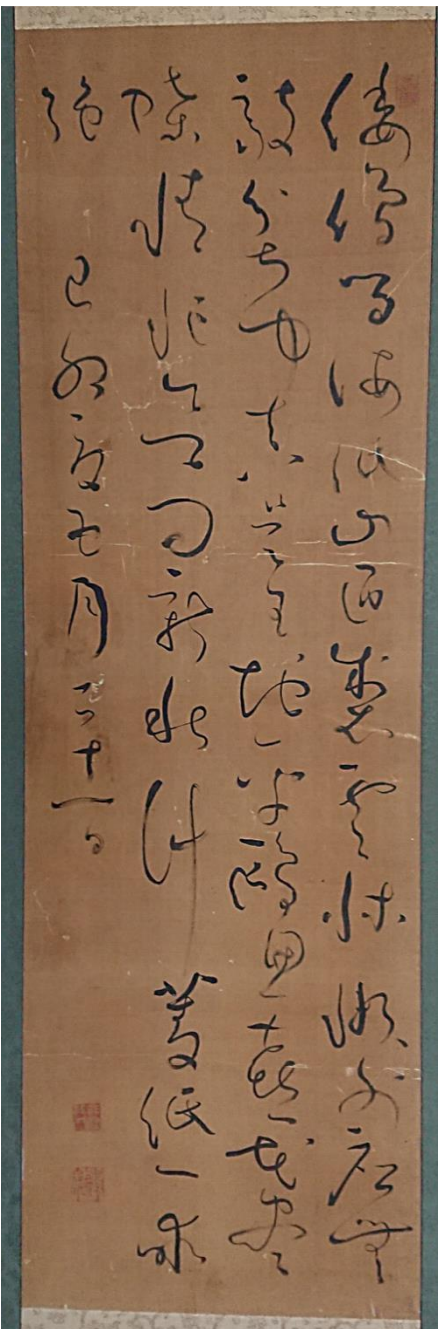
平湖…浙江省嘉興市に平湖市

咫尺…しせき、わずかな距離

空と湖面との距離をさす

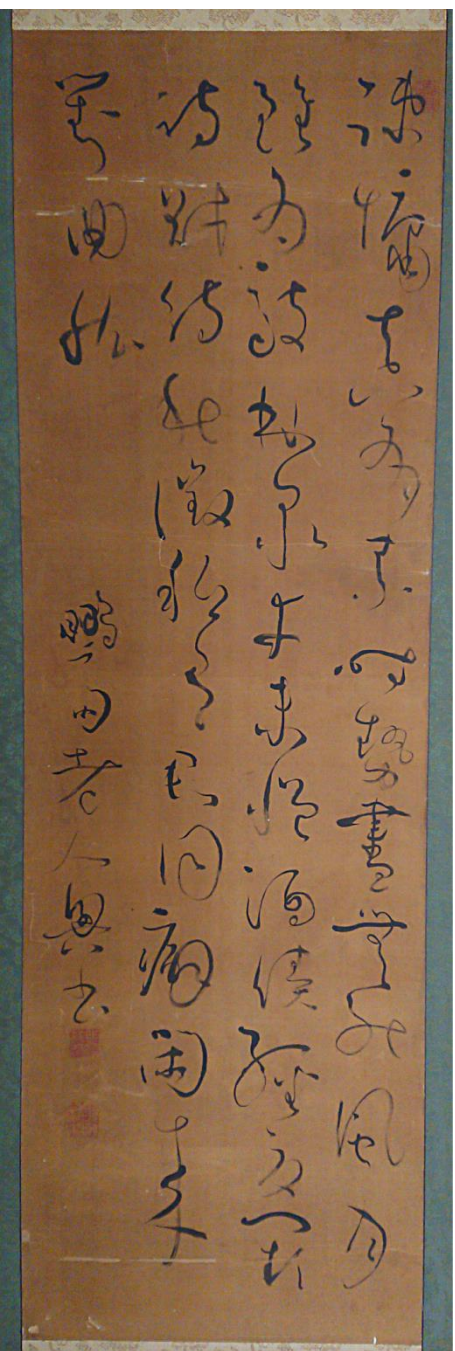
亀田鵬齋

「陸龜蒙詩『襲美見題郊居十首、因次韻酬之以伸榮謝』 3



倭僧留海紙 山匠制雲床。 懶外應無敵 貧中直是王。
池平鷗思喜 花盡蝶情忙。 欲問新秋計、菱絲一畝強。

「陸龜蒙詩『襲美見題郊居十首、因次韻酬之以伸榮謝』 10



疏慵真有素 時勢盡無能。 風月雖為敵 林泉幸未憎。
酒材經夏闕 詩債待秋征。 只有君同癖 閒來對曲肱。

陸龜蒙(りくきもう、881年)は、**中国・唐**の詩人。**字は魯望**。

皮日休(ひじつきゅう、830年代〜883年)は、**中国・唐**の詩人・革命的

社会派の学者。字は襲美。友人に、同年代の詩人である陸龜蒙がおり、二人を合わせて皮陸と呼ぶことがある。

亀田鵬齋の書による碑

黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑（一八一七年 下野市本吉田）



黄梅寺（おうばいじ）跡

黄梅寺は江戸湯島靈雲寺（真言律宗）の末寺で、寛文年間（一六六一～七二）に本吉田を知行した旗本松前氏の祈願寺として深玄律師が開基したと伝えられる。明治4年（一八七一）の「黄梅寺境内鹿（そ）絵図」によると、境内には本堂、経蔵、供養塔、宝篋印塔、弁天が設けられていた。また明治22年（一八八九）に吉田村が成立すると、境内に明治31年（一八九八）まで吉田村役場が置かれ、庁舎は本堂や不動堂とともに平成初期まで残っていたというが、現在は廃寺となっている。

旧境内にある石造の宝篋印塔は高さ4.7mで、石造のものとしては比較的大型で市内最大のものである。蓮華の請花上部2段目の基礎四面には「享保二十星紀乙卯仲春鬼宿日」の銘文が刻まれ、享保20年（一七三五）に造立されたことがわかる。



現在の黄梅寺跡地。荒寥とした空き地に放置された宝篋印塔、黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑、柘植の木が栄枯盛衰の感傷を誘う。

黄梅寺第四世光雲和尚壽藏碑（一八一七年）の拓影（二面から）

和尚者道徳精進常坐不卧持戒堅固之師也既承具足戒於靈雲第七世
靈麟大和尚而為下毛河内郡本吉田首梅寺第四世之住主焉和尚名光
雲字見龍初名居中又自彌谷神堂俗姓酒井氏下總相馬郡中谷原邑之
人父某自於啖素奉佛已而需其教持守不少懈御有海直沙彌者道價頗
高自持戒律不就寂者四十餘年遷化之日茶毗之後舍利數百顆實清淨
法身之所也又其徒之愛直者作羅尼及普門品之秘自此之後觀色影於
梁世等死生於夢中而捨妄歸直之志愈堅矣即以同郡某子為嗣以女妻
之乃欲別頭披緇而適世妻子環立留之其明夜竊出家而太時年三十六
遂入于萊州長樂寺就隆泉上人而受教焉陵後覺雲彌智淨繩床趺坐不
復下山後以壽而終先是投其子某于黄梅寺光麟和尚為其弟子即光雲

和尚是也時年十二歲岐嶷穎悟篤信佛曲在黄梅者二十年道徳精進深造
佛諦普與同郡俊禪和尚相友善世推禪法為師字觀行者禪公後住于芳賀
郡淨蓮寺徒弟奉侍其側者衆皆謝遣之自運米搬柴以給薄粥杜門枯
坐者二十年老寢疾和尚適造庵訪之禪公執手而告曰老身死在旦夕
惟恨木山大悲閣及草庵日就圯毀頌和尚重修焉若賴和尚之靈以山門增輝
則老身永瞑于地下矣和尚遂領之乃十方化緣以踐禪公之遺囑焉於是
樋口谷田貝兩村里之及擅越羊競為除地聚財剝削起五金帛之施川匯
河輪堂塔經閣皆極極莊嚴累月工竣實竟政乙卯春三月也和尚乃登壇說
法講演妙義四方自茲而到者六百餘人今茲和尚年六十九雙瞳如電骨
格強健嘗擇地造壽藏以為安措之慶焉使余作之銘嗟呼其父淨公決然捨

妄迷而超脫塵外和尚嗣之而其所以披南嶽幽邃慈秘櫃東漸弘通之經
大轉法輪使斯道而流通無礙於後代者實淨公肇基之力也而和尚開演
之功亦勉矣哉乃按其所聞記梗槩云
文化十四年丁丑秋七月

江戸 鵬齋龜田興模并書